

教師夏目金之助の研究（十一）

—鈴木三重吉との師弟関係—

森 下 恭 光

緒 言

本論の目的は、夏目金之助が東京帝国大学文科大学の英文学科の講師として在職中に同学科で夏目の講義を受講した明治三十七年度入学の鈴木三重吉が、明治三十八年から三十九年までの休学中及び復学後の三十九年から夏目が朝日新聞社入社によって職を辞する四十年四月までの約三年半にわたる師弟関係についてその実態と特質を明らかにすることにある。

鈴木三重吉は、児童文学の分野で顕著な業績をあげ、とくに児童文芸雑誌『赤い鳥』を高い志を抱いて創刊したことによってその名を歴史にとどめているが、その活躍の基礎を形成する時期に夏目の門下生としてその指導を受け、資質を開花させていったであろうことは容易に推測されるところである。

本論では、とくに文学者としての夏目が文学者としての鈴木にどのように関わることでその師弟関係を展開して行ったかを明らかにすることが主要目的となる。

—

鈴木三重吉（本名、明治十五年—昭和十一年）が、夏目金之助に接することになったのは、彼が第三高等学校を卒業（明治三十七年）し、東京帝国大学英文学科に入学し、学生として夏目金之助講師の講義を受講するようになったことによる。

当時の模様を鈴木は次のように記している。

「学校では唯、教場でノートを取って来るだけで、先生と学生との個人的な親しみは元よりなかった。だから夏目先生でも私一人を特別に御存じである筈もない。⁽¹⁾」とはいいいながら、鈴木自身は、彼が受講していた講義の中では、夏目金之助、上田敏、桑木巖翼、松本亦太郎、大塚保治等が担当するものには惹きつけられていた。そこである時鈴木は夏目に質問をした。「私は詩の分解が分らないので、これに関する何かい、書籍はないでしょうかという問題であった。⁽²⁾」それに対して夏目は図書館にある一冊の本を紹介した上で、そういうものは完全に分るものではないという意味のことを言い添えた。これが鈴木
の回想による夏目と彼とが言葉を交わした最初の模様である。これによって推測し得ることは、この時点での夏目と鈴木の関係は、講義の担当者と受講者の関係以上のものではなかったということである。

しかし、翌年（明治三十八年）になると状況は急変する。この年の一月に鈴木は、夏目が「ホトトギス」に発表した『吾輩は猫である』（第一篇）と同月に「帝国文学」に発表した『倫敦塔』を読んだことにより彼の中に急激な変化が生ずる。「私は殆ど全身の血が

燃え上って、じっとしてられないで町を駆けまわって歩きたい程、先生の作品に昂奮した。⁽³⁾」というのである。これ等の作品に彼が昂奮を覚えた理由を次のように分析している。『倫敦塔』が、「日本文学にとっては破天荒な深刻なロマンスであった⁽⁴⁾」こと。また、『吾輩は猫である』は、「全体に漲ったユーモラスな気分の底に一種の純清と、淋しさ^{シリンテイ}とが漲っていた⁽⁵⁾」ことによるというものである。

このように鈴木が夏目に向ける強烈な関心は、とくに夏目の作品によって昂揚して行くのであるが、一方で、生来の神経衰弱が激化し、入学後一年を経過した時点で、休学を決定することになる。この時期における彼の所在を書簡によって調べると、年来の親友である加計正文に宛てた手紙が六月十二日付のものまでは東京市より出されているが、六月二十七日には、故郷の広島市猿楽町より出されていることから、六月末頃には故郷の広島へ居を移していたことが判明する。

しかし、この時期にあっても、鈴木が夏目に対する思慕の念が衰えることはなかった。

「私はその苦しい間でも夏目先生が片時も忘れられなかった。先生の学識と先生の人格との放射が、私が何処にいても、いつでも私を吸引しているような気がしていた。私は先生に対しては宗教的といい得る程に牽引されていた。⁽⁷⁾」との回想がそれを証明している。

休学を決めて故郷で休養の生活を送ることになった鈴木であるが、その時点で夏目への思慕の念を直接訴えることをしたわけではない。夏目にとって鈴木が存在は特別のものではなかったからである。その夏目に鈴木が存在を印象づける役割を果たしたのは、第三高等学校から東京帝国大学英文学科に進み、夏目よりその学才を高く評価されていた親友の中川芳太郎⁽⁸⁾である。第三高等学校の同窓で親友の中川は、夏目宅へ訪れる機会があり、その折に鈴木のことを詳細に伝えたことを友人を介して知った彼はその一部始終を得意気に加計正文に書き送った。明治三十八年六月十二日付の書簡によってその間の事情を察することができる⁽⁹⁾。

それによれば、中川は夏目に「先生を素敵に崇拝している人がありますぜ」と切り出し、興味を示す夏目に対して、それが英文科の一年生で、三高から来た友人の鈴木であり、その鈴木が「いつもいつも先生の事ばかり言って居る」こと。さらに、夏目のことを「金やん金やん」といっていることまで伝えたこと。しかも、夏目がそれを大に喜んで「金やん！こいつは妙々」とまでいった上に、鈴木を非常に話せる男だといって喜び、「是非一度つれて来てくれ」とまで言ったことを伝えたという。

鈴木を夏目に印象づける上で、さらに決定的役割を果たすことになったのは、やはり中川であった。同年九月十一日付で夏目が中川に送った書簡によってそのことは明白である。この長文の書簡は、中川に鈴木が送った夏目に寄せる思いを綴った長文の書簡を夏目に廻送したのを夏目が読み、その感想を記したものである⁽¹⁰⁾。

夏目は、鈴木が中川に宛てた手紙の長さにまず驚いた上で、その内容について、深い興味を示すと同時に感嘆の念さえおぼえる。その主な部分を次に抄出する。

「三重吉は僕を愛するとか敬うとか云う外に僕は博学だとか文章家だとか良教授だとか云うて居らん。そこで君の僕に対する親愛の情は全くパーソナルなので僕自身がすきなのだと思考仕る。そこが甚だ他人と異なる所で且甚だ難有い所である。」

「あれ丈長く僕の事をかいて居り又あれ丈僕のことをほめて居るが少しも御世辞らしい

所がない。誇張も何もない。どうしても真摯な感じとしか受取れん。是が僕の三重吉君に尤も深く謝する所である。」

「どうか僕の云う事文を三重吉君に伝えて下さい。尤も望む所は一年間田舎へ引籠るのをやめて出京する様に勧めて下さい。僕には三間の手紙をかく勇気がないから是で御免を蒙ります。実際三重吉君より僕の方が神経衰弱さ。親分が大神経衰弱だから子分は少々神経衰弱でも学校へ出るがよからう。」

この書簡の意義は、鈴木にとっても夏目にとっても深く大きい。それを論ずる前提に次の点をあげて置きたい。

第一点として、この書簡は当事者（夏目と鈴木）の間で直接交わされたものでないこと。

第二点として、仲立ちをする役を負う中川は当事者の双方から信頼を得ていること。

第三点として、当事者の双方に神経衰弱に苦しむという病歴があること。

以上の3点を前提にして以下にその意義を論ずることとする。

まず、夏目の側からの意義としては、自分に対して敬慕の念を抱く人物が、自分に対して直接にはなく、自分もよく知る中川という学生にその思いを綴り送っているということがあげられる。これがもし夏目に対して直接に送られたものであれば、夏目は別の受け止め方をしたであろう。理由は、直接に向けられる讃辞は、自分が熟知する相手でない限りお世辞として受け取る習性が夏目にはあったからである。そのことは引用した箇所に「少しもお世辞らしい所がない」との文言があることによっても明らかである。当時の夏目が置かれていた社会的地位を考量するならば、東京帝国大学講師、第一高等学校講師のいずれも学者、教師としては最高の評価を与えられる位置にあった上に、作家としても高い評価を得つつあったから、「お世辞」を日常的に聞かされていたはずである。そのような夏目にとっては、鈴木が夏目に向けた一途ともいえる敬慕の情は、稀少なものであり、それだけに感慨深いものがあったと考えられる。したがって、夏目の側からとらえると、この点に最も大きな意義があったといえるのである。

次に、鈴木の方から見ると、この書簡の意義は夏目のばあいには比して、より広く大きい。

まず、鈴木にとっては学生として、その講義や作品を通じて敬慕する夏目ではあっても、夏目からすれば中川を通して知るところがあるに過ぎないとも言える鈴木のことを、中川に送った長文の手紙を読んだだけで、これ程までに感激し、手放しで讃美してくれているという事実に接することができたことにより、名状し難い感銘を受けたことがあげられる。

次に、神経衰弱のため休学して故郷に帰ろうとする鈴木に対して、自分も神経衰弱であることを告白し、「親分が大神経衰弱だから子分は少々神経衰弱でも学校へ出るがよからう。」とまで心を開いた形で鈴木に向かい、休学を思いとどまらせようとしてくれる夏目の心情、思いやりが鈴木には無上の慰藉になったはずであるという点があげられる。実際、夏目にとって、神経衰弱は、明治二十七年（二十八歳時）頃より、断続的に苦しんで来た経歴を持ち、近くは明治三十六年にもそれが昂進し、妊娠中の妻を実家に帰して、一時別居するという程の深刻な事態を経験している⁽¹⁾。そのような夏目からすれば、自分が神経衰弱の「親分」で鈴木をその「子分」と見立てているのは夏目独特の諧謔ではあっても、情を込めた説得であったと考えるべきである。

しかし、この説得は、結果的には成功しなかった。鈴木は、休学を決意し、故郷に留る

ことになったからである。その間に、鈴木の方から書簡を送って休学を決意するに至る事情を夏目に釈明していたはずであるが、その書簡自体は保存されていない、しかし、紹介した書簡を中川に送った日より約1ヶ月後の十月十二日に夏目は広島市猿楽町の鈴木宛に書簡を送っている。それによって、鈴木が夏目に宛てた書簡の内容を推測できる。書簡の書き出しは次のようになっている。「御手紙は拝見しました休学の件も萬不得已事情ありての事なれば却って出京を御勧めして一時でも考え込ましたのは甚だ恐縮の至です。⁽¹²⁾」この文面によって鈴木が夏目に休学を決意するに至った事情を報告し、その事情を夏日も理解したことが察しられる。しかし、事情を察しはしたものゝ、鈴木の所感を全面的に肯定したわけではなかったことも次の文面によって明らかである。すなわち、「休学中々学の教師というけれど教師杯をしては神経衰弱が起る許りで決して休学にはなりませんよ。⁽¹³⁾」と忠告しているからである。ここで、夏目が鈴木に対して、休学中に中学の教師になることは反対であるとの意見を表明しているのは、一見唐突な感じを与えるが、夏目からすれば、それなりの理由があったことが推測される。その理由とは、夏目が明治二十八年四月から明治二十九年四月にかけて一年間、愛媛県尋常中学校で英語教師を勤めた経験があり、中学生を扱う難しさを体感したことがあったからである⁽¹⁴⁾。それが根底にあって、夏目は神経衰弱に悩む鈴木にとって、それが適当な職であるとは到底考えられなかったということであろう。

つづく書面で夏目は「矢張り島へ渡って遊んで居る方がいい。僕も時があれば小笠原島位へ一寸流されて見たい。」と、神経衰弱にはあくまでも休養が必要であることを提言している。夏目から書簡を受け取った鈴木は、十月二十日付で友人の加計正文に宛てた書簡でこのことを次のように報告している。「金やんは二三日前に返事を寄せられた。僕は金やんの言葉の謙遜なのに恐縮してる。或時は僕の伯父かなんぞのように思う。中略。これで落ちついたよ。金やんは中学の教師の事は反対だ。⁽¹⁵⁾」

この書簡を認めた時点では、鈴木は広島市内に居て、まだ島（能美島）には移っていない。書簡集によれば、鈴木が能美島に移っていることが確認されるのは十一月二十一日である。この日、鈴木は能美島より東京在住の友人東新宛に長文の書簡を送っている。この書簡には、中学教師の件では未だに断念し得ないでいる心境を吐露している⁽¹⁶⁾。したがって、十月二十日付で加計正文に送った書簡にある「これで落ちついたよ。」の意味するところは、休学をして島にでも渡って療養することに気持ちが固まったという程度で、夏目の言うように中学教師は断念するということまでは含まれていないと考えるべきである。

ところで、夏目は十月十二日に鈴木に書簡を送った後、半月程の間を置き、広島市内に居住する鈴木に宛てて、十一月一日⁽¹⁷⁾、三日⁽¹⁸⁾と連続してはがきを書き送っている。両便ともに鈴木の健康については一切触れず、鈴木が送った柿と貝の御礼を伝えるのが主旨の便りになっている。

この後、夏目が鈴木に書簡を送るのは十一月十日である。十一月に入って十日間で三通書き送っていることになり、かなりの頻度である。十一月十日の書簡は次のように始まる。「三重吉さん一寸申上ます。君は僕の胃病を直してやりたいと仰やる御心切は難有いが僕より君の神経痛の方が大事ですよ早く療治をして来年は必ず出て御出でなさい。⁽¹⁹⁾」そして、この書簡の後半に夏目は次のように記す。

「君は島へ渡ったそうですね。何か夫を材料にして写生文でも又は小説の様なものでもかいて御覧なさい。吾々には到底想像のつかない面白い事が沢山あるに相違ない。文章はかく種さえあれば誰でもかけるものだと思います。⁽²⁰⁾」

この書簡の効果は、約一ヵ月後に表われる。十二月五日に鈴木が友人の鈴木周作に宛てた書簡の追伸の部分に次のような文面が見られる。

「僕は夏目さんにおだてられて島の事を材に取って何かかいて見たいと思ひましてね、いつか五六枚かきかけたがほってあります。⁽²¹⁾」これによって筆は進んでいないとはいえ、書く意志を見せていることが分かる。

鈴木が本格的に創作の筆を執り始めるのは、翌年（明治三十九年）に入ってからである。この年の二月六日付で友人の鈴木周作に宛てた長文の書簡の末尾に次のように記している。

「先月からボツボツとかきためて一篇の小説が出来た。少々自惚れてる passage もある。夏目さんに油をかけられてかいたのだから先生に上げる積りだ。ホト、ギスへ出して貰うつもりだ。四月頃に出れば出よう。⁽²²⁾」これによって明らかなように、一月から書き始めて二月には書きあげている。このことは、鈴木から夏目に伝えられていたと思われる。それは、二月十一日付で夏目が鈴木に送った書簡に次のようにあることによっても推測できる。夏目は冒頭に近いところで「君小説をかいたら送り玉え。早く拝見仕りたい。」⁽²³⁾とあるからである。その小説が夏目の許へ届けられたのは、四月に入ってからである。四月十一日付で夏目が鈴木に送った書簡には次のように記されている。

「御手紙も小説も届いて只今両方とも拝見千鳥は傑作である。こう云う風にかいたものは普通の小説家に到底望めない。甚だ面白い。」こう書き出した上で、「強いて難を云えば」⁽²⁴⁾とことわりながら、細部について批評を加えている。しかし、全体的には賞讃の言葉が連ねられているとの印象を受ける書簡である。「僕が島へ遊びに行つて何かかこうとしても到底こんなには書けまい。三重吉君萬歳だ。⁽²⁵⁾」の文面はそれを象徴するものといつてよい。夏目はこの作品をホト、ギスへ出すことを提案し諒承を求めている。

同日、夏目は「ホト、ギス」を主宰する高浜虚子に書き送っている。その書面は次のとおりである。

「僕名作を得たり之をホト、ギスへ献上せんす随分ながいものなり作者は文科大学生鈴木三重吉君。只今休学廣島にあり。僕に見せるために態々かいたものなり。僕の門下生からこんな面白いものをかく人が出るかと思うと先生は顔色なし。⁽²⁶⁾」

次いで四月十五日、夏目は鈴木に書簡を送り、虚子の書評を紹介している。⁽²⁷⁾

「二三日君に手紙を出すと同時に虚子に手紙を出して名作が出来たと知らせてやったら大将今日来て千鳥を朗読した。そこで虚子大人の意見なるものを御参考の為に一寸申し上げる。」との書き出しで虚子の批評を紹介している。夏目の要約によれば、「要するに虚子は写生文としては写生足らず、小説としては結構足らずと主張す」るのが虚子評であるというものである。

『千鳥』⁽²⁸⁾は翌五月に雑誌「ホトギス」に掲載された。『千鳥』は高い評価を得、そのことが作者の鈴木に伝えられると、それを得意気に友人に加計正文に書き送っている。

五月七日付の書簡で鈴木は、「千鳥」が出たが読んだか。諸方から祝辞が舞い込む。坂

本四方太氏は『とても僕なぞは及ばない。名文だ』とさわいでいる。寺田虎彦氏は『好男子萬歳』と言っている。金やんは『千鳥が大好評だから僕大に鼻が高い。あれにケチをつけた虚子は馬鹿だと言われている』など、言って来た。当人の僕は意外だ。これからウカウカ物がかけない。⁽²⁹⁾」とその喜びと興奮を率直に表現している。

「千鳥」の好評は鈴木に自信を取り戻させる作用を及ぼしたが、それでも故郷から離れることをすぐに決断するまでには至っていない。書簡集によれば、加計正文、田中経太郎、鈴木周作との交信は絶えることがなく、彼等との交信によって得られる情報の交換は、彼を閉塞的精神状況に陥ることからの回避と、それによる精神の安定に資するところがあったと想像される。もちろん、夏目との交信は、彼にとっては最も大きな作用力を持ったはずである。

二

鈴木が一年に及ぶ休学に終止符を打ち、上京し、復学したのは九月の半ばであった。

九月十六日付の加計正文に宛てた書簡により、それは確認できる。その書簡の冒頭には次のように記されている。「一昨夜九時四十分入京。田中、東等数人の人に迎えられた。みんなで本郷の藪そばへ行った。僕は涙が出て困った。昨日は早くから続々尋ねて来る人があった。午過ぎに中川兄が来て一所に夏目先生を訪問し夜の九時頃までいた。」⁽³⁰⁾つまり、九月十四日に上京し、翌日には中川に伴われて夏目宅を訪れ、午後九時頃まで居たというのである。その時の喜びを鈴木は「はじめて先生に会った時の感は言うに言われない⁽³¹⁾」と記している。鈴木の方から見れば夏目に会える喜びは格別のものではあったが、夏目の方はこの時期に身内の不幸（妻鏡子の父、中根儀一が九月十六日に急死。⁽³²⁾）を抱えていた。その事を知っていたのであれば、その間に夏目宅に出入りすることを当然遠慮するはずであるが、その様子が特に見えないのは、夏目の方が出入りする者達（門下生他）に配慮した結果と考えられる。この九月に夏目は『草枕』⁽³³⁾を『新小説』誌上に発表した。この『草枕』執筆について森田草平は「先生がこの作をしようと思立たれたについては、いくらか三重吉の『千鳥』の影響がありはせぬか。⁽³⁴⁾」と論じている。

さて、公私ともに多忙を極めるようになった夏目は、門下生の発案（鈴木三重吉の発案による⁽³⁵⁾）で、木曜日（午後三時から）を面会日と定める。そのことを告げるはぎきを十月八日（月）に一斉に関係者（五人）宛⁽³⁶⁾に出していることから、第一回は、十月十一日開催ということになる。いうまでもなく鈴木はその常連として参加することになる。この時期、夏目の住居は本郷区駒込千駄木町五七にあった。一方、鈴木 of 居所は、本郷区弥生町にあったので地理的にも近接していた。

こうして、夏目と鈴木の師弟関係は濃密なものになって行く。もちろん夏目は鈴木だけを門下生の中で特別扱いをしていたわけではない。しかし、鈴木のほうには特別の感情があった。その間の事情をうかがわせる資料になるのが、夏目が鈴木に宛てた十月二十六日付の書簡である⁽³⁷⁾。書き出しは「君の夜中にかいた手紙は今朝十一時頃よんだ。」で始まり、その後は、木曜会のメンバーの人物評がつづく。おそらく鈴木 of 書簡にはメンバーについての印象が記され、それに対する夏目の感想を求める内容が含まれていたと推察される。そこにあげられているのは、寺田寅彦、坂本四方太、松根東洋城、森田草平の四人で

ある。その中で、寺田、坂本については『千鳥』を賞讃した人物であることもあり、鈴木は好意的であったようで、夏目もあえて論評していないが、松根と森田については擁護に努めている印象を受ける。夏目の見る所では、松根と森田はその性格において正反対であるが、双方ともにその人格を認めており、松根に対しては「可愛らしい」、森田に対しては「可愛そう」の表現を用いている。この書簡では、他に、鈴木は夏目から教訓を得たいとの願望を伝えていたと思われる。それに対する答えが、「僕の教訓なんて、飛んでもない事だ。僕は人の教訓になる様な行をしては居らん。僕の行為の三分二は皆方便的な事で他人から見れば氣違ひである。中略。僕は僕一人の生活をやっているのだから人に手本を示しているのではない。近頃の僕の所作を真似られちゃ大変だ。⁽³⁸⁾」というものであった。この中で「近頃の僕の所作を真似られちゃ大変だ。」と警告している部分は注目すべき意味を持っている。それは、夏目を師と仰いで集まる者達は、程度の差はあれ、夏目の全人格を肯定し、憧憬の対象にまでする傾向があり、その結果が夏目の「真似」に至るということがあるのを夏目自身が実感していたことから発せられた警告であると考えられるからである。夏目から見れば、鈴木も例外ではないばかりか、その傾向の強い人物であると観察されていたはずだからである。

この書簡を送った同日の十月二十六日に夏目は「第二信」を鈴木に送っている。その書き出しは「只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教えてもらって決して損のない事である。⁽³⁹⁾」で始まっている。「第一信」では、「僕の教訓なんて、飛んでもない事だ。」と言いながら、第二信では、教訓を記そうとしている。一種の矛盾と見ることができが、第二信の内容が文学者（作家）として先輩にあたる者として、後輩の作家に贈る教訓としてとらえるならば、趣旨は理解できるものとなっている。そこで、夏目の教訓は次のように展開する。「世の中は自己の想像とは全く正反対の現象でうづまっている。そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出来ぬという事である。⁽⁴⁰⁾」と一般論としての現実世界での生き方を示し、つづいて、文学者としての生き方を次のように提示している。

「苟も文学を以て生命とするものならば単に美という丈では満足が出来ない。丁度維新の当士勤王家が困苦をなめた様な丁見にならなくては駄目だろうと思う。間違ったら神経衰弱でも氣違ひでも入牢でも何でもする丁見でなくては文学者になれまいと思う。⁽⁴¹⁾」

これによって夏目が鈴木に与える教訓とは、文学者としての生き方を示すものである限り、夏目自身にも課せられる課題であることは明らかである。したがって、夏目は鈴木に対して課する形をとってはいるが、それは自分に対しても課されるべきこととしてとらえているのであって、そこに夏目の個性すなわち、先輩、指導者としての特性があらわれていると見ることが出来る。実際、この書簡の中で自作の『草枕』をとりあげ、主人公の審美的生き方を否定して見せているのである。

一方、鈴木に対して夏目が教訓として伝えようとするのは、鈴木が「自分のウツクシイと思う事ばかりかいて、それで文学者だと澄まして居る様になりはせぬかと思⁽⁴²⁾」われる傾向を見せていることに対する警告である。

もちろん、夏目も美を追求する生き方を全面的に否定しているわけではない。もし、そうであるならば、夏目が『草枕』等で示している美を追求する生き方を全面的に否定する

ことになるし、それは夏目の資質の重要な部分を否定することになる。それは一種の自己否定とも言えるから、そこまでは夏目も言うのではない。あくまでも、その生き方がすべてであってはならないと言うのである。したがって鈴木にも今迄の生き方（創作に際しての姿勢）だけで貫くことに警告を発していると考えられるのである。

夏目から教訓の書簡を受けた後、鈴木は創作にも専念し、十二月七日付で加計正文に宛てた書簡で第二作の完成を告げている。「小説は『山彦』と命名した。大作である。⁽⁴³⁾」書簡によればこの作品は夏目宅で朗読され十人程の参会者の前で披露された。鈴木は得意であり、参会者の間でも好評であったが、夏目からは、前作の時のような反応を得られなかった。鈴木自身「先生の趣味には合わぬ作」⁽⁴⁴⁾であることを認めている。

夏目は、十二月八日に鈴木に宛て、書簡を送っているが極めて短かいもので、「別紙山彦評森田白楊より送り来り候御参考の為め入御覧候⁽⁴⁵⁾」で始まるこの書簡には夏目自身の評語は何も記されていない。このことによって前作に比較して『山彦』に対する夏目の評価の高くないことが知られる。

この年の暮、十二月二十七日、夏目は住居を本郷区駒込西片町へ移転する。これに先立ち十二月二十四日、夏目は鈴木にはがきで「天気ならば二十七日転宅の筈どうか手伝に来てくれ玉え⁽⁴⁶⁾」と伝えている。この移転の模様については夏目夫人が『漱石の思い出』の中で回想している。⁽⁴⁷⁾ 夏目夫人によれば移転日は十二月二十八日となっている。移転に関わったメンバーは夏目夫人の回想によれば、門下生では年齢順に野村伝四、鈴木三重吉、野上豊一郎、小宮豊隆の四人の名があげられている。

翌年（明治四十年）、一月号の「ホトトギス」誌上に『山彦⁽⁴⁸⁾』が掲載され、直後の一月十三日、鈴木は友人の加計正文に書簡を送り『山彦』が諸家によって好評を得ていることを実名をあげて報告し、自身の言葉として「これまでこんな風のをかいた小説家はない。ホトトギス一派の写生文を一步進めたものが僕で僕の文章のようなのが土台となって大文学が出来るのだ⁽⁴⁹⁾」と自信満々の心境を伝えている。

翌月の二月、夏目の一身上に大きな変化が起きる。朝日新聞より入社勧誘があったのである。二月二十二日付で夏目は朝日新聞社の白仁三郎宛に書簡を送っている。内容は訪問日時についての問い合わせに対する回答で、二月二十四日、十一時から十二時の間を希望する旨を伝えるものである⁽⁵⁰⁾。次いで三月四日には、白仁三郎に宛て、入社を決意する為の資料として必要な条件となる手当の件、仕事の内容と量、義務と権限（版權のことなど）について問い合わせている⁽⁵¹⁾。その一週間後には、同じ白仁三郎に宛て、「大約左の如き申出を許可相成候えば進んで池辺氏と会見致し度と存候⁽⁵²⁾」と前書きして、六項目について確認している。その中でとくに注目されるのは、月給二百円の社側からの提示を容認した上で、盆暮の賞与を求めていることと、自身の地位の安全について池辺三山及び社主により正式な保証を得たいとしている二点である。この後、夏目は朝日新聞社を代表する立場にある池辺三山の来訪を三月十五日に受け、面談の結果、朝日新聞社への入社を決意する。⁽⁵³⁾

そして、十日後の三月二十五日には、東京帝国大学・第一高等へ辞表を提出している。

その間、どの程度の情報が門下生達に伝わっていたか、詳細は不明であるが、辞表を提出する頃には、その情報は相当の範囲まで広がっていたと推測される。鈴木は夏目の辞職

については特別の言及はしていない。英文学科の学生である彼にとっては、大学で夏目の講義を受講することが出来なくなるという事態が発生しているにもかかわらず、そのことによる動揺を見せていないという点に、夏目と鈴木との師弟関係の側面が暗示されていると考えることもできる。

結 語

以上の論考によって明らかにし得たことは次の点である。まず、夏目と鈴木との師弟関係は形式上は、鈴木が東京帝国大学に入学し、英文学科に籍を置き、学生として講義を受講した時に始まるが、実質的には鈴木が大学を休学する明治三十八年に始まったということ。

次に、夏目と鈴木との師弟関係は、少なくとも明治三十九年までは書簡の往来によって持続するという特異なものであったこと。

さらに、復学した後も夏目と鈴木との師弟関係は大学という教育の場を主たる場面とせず、専ら、夏目との私的交流によって学校外において展開されていたこと。

そして、最も顕著な特質としては、夏目と鈴木との師弟関係は文学創作を軸としたものであり、文学者としての先輩と後輩という関係で展開したものであったということの4点が明らかになった。

(注)

1. 鈴木三重吉, 創作と自己, 鈴木三重吉全集第5巻所収, 岩波書店, 昭和13年, 33ページ。
2. 同前書, 23ページ。
3. 同前書, 24ページ。
4. 同前書, 24ページ。
5. 同前書, 24ページ。
6. 鈴木三重吉, 書簡, 鈴木三重吉全集第6巻所収, 岩波書店, 昭和13年, 46ページ。
7. 同前書, 26ページ。
8. 中川芳太郎, 東大英文科卒。夏目の『文学論』は芳太郎が講義ノートをもとに原稿を作製し, 夏目が, 校閲して刊行された。
9. 鈴木三重吉, 書簡, 前掲全集第2巻所収, 45ページ。
10. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第27巻所収, 岩波書店, 1980年, 259-262ページ。
11. 三好行雄, 夏目漱石年譜, 夏目漱石事典, 別冊国文学No39所収, 学燈社, 平成2年, 396-397ページ。
12. 夏目漱石, 書簡, 前掲全集第27巻所収, 267ページ。
13. 同前書, 267ページ。
14. 小宮豊隆, 夏目漱石, 岩波書店, 昭和24年, 285-294ページ参照。
15. 鈴木三重吉, 書簡, 前掲全集第6巻所収, 63ページ。
16. 同前書, 70ページ。
17. 夏目漱石, 書簡, 前掲全集第27巻所収, 272ページ。
18. 同前書, 273ページ。

19. 同前書, 275ページ。
 20. 同前書, 275ページ。
 21. 鈴木三重吉, 書簡, 前掲全集第6巻所収, 74ページ。
 22. 同前書, 86ページ。
 23. 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第28巻所収, 岩波書店, 1980年, 17ページ。
 24. 同前書, 38ページ。
 25. 同前書, 39ページ。
 26. 同前書, 39ページ。
 27. 同前書, 40ページ。
 28. 鈴木三重吉, 鈴木三重吉全集, 第1巻所収, 岩波書店, 昭和13年, 4-45ページ。
 29. 鈴木三重吉, 書簡, 前掲全集第6巻所収, 94ページ。
 30. 同前書, 103ページ。
 31. 同前書, 103ページ。
 32. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録, 漱石の思い出, 文芸春秋, 1994年, 180-181ページ。
 33. 夏目漱石, 漱石全集第4巻所収, 岩波書店, 1979年, 5-127ページ。
 34. 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和18年, 211ページ。
 35. 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲), 494ページ。
 36. 夏目漱石, 書簡, 前掲全集第28巻所収, 96-97ページ。
 37. 同前書, 121-122ページ。
 38. 同前書, 122ページ。
 39. 同前書, 122ページ。
 40. 同前書, 123ページ。
 41. 同前書, 124ページ。
 42. 同前書, 123ページ。
 43. 鈴木三重吉, 書簡, 前掲全集第6巻所収, 113ページ。
 44. 同前書, 113ページ。
 45. 夏目漱石, 書簡, 前掲全集第28巻所収, 145ページ。
 46. 同前書, 155ページ。
 47. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録, 前掲書, 182-184ページ。
 48. 鈴木三重吉, 前掲全集第1巻所収, 48-87ページ。
 49. 鈴木三重吉, 前掲全集第6巻所収, 119ページ。
 50. 夏目漱石, 前掲全集第28巻所収, 173ページ。
 51. 同前書, 174ページ。
 52. 同前書, 175ページ。
 53. 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲), 559-561ページ。
- ※ 引用文中の旧漢字, 旧仮名遣いはすべて新漢字, 新仮名遣いに改めたことをことわっておく。